

## 0. 2005年度実習報告書作成によせて

日本語文化専攻日本語教育学講座 日本語教育実習担当

鷺見 幸美

本年度も、名古屋市教育委員会、名古屋大学留学生センターのご協力を賜り、実習生が貴重な日本語教育実習を経験することができた。まず、関係各位に心よりお礼申し上げる。

本年度の日本語教育実習には、博士前期課程2年の日本語母語話者8名が参加した。本年度の特徴は、実習生のほとんどが日本語教育経験のない者であり、経験のある者も非常に限られた僅かな経験しかないという点である。その8名が、1年次秋の名古屋大学留学生センター開講の日本語授業見学を経て、春には名古屋大学留学生センター春季集中日本語講座で一つのクラスを担当し、夏に名古屋市教育委員会英語指導助手（AET）を対象としてコースを開講した。そして、修士論文を提出した後休む間もなく、この実習報告書をまとめた。

博士前期課程の2年間は瞬く間に過ぎて行く。修士論文のことで頭がいっぱいで、多大な時間をとられる教育実習を敬遠する学生も少なくない。その中で、実習参加の8名は、非常に熱心に教育実習に取り組んだ。特に、夏季実習におけるチームワークの良さが印象的である。実習生による自主運営を基本とした夏季実習は、コースデザインを含む包括的な体験ができ、学ぶことが多い反面、負担・責任も重い。その運営において、それぞれの長所を生かした役割分担をし、仕事を押し付け合うことなく、他者に頼りすぎることなく、誰もが実習メンバーとしての責任を積極的に果たしていた。一人一人が学習者中心に考えることで、必然的にチームワークが良くなっていたのだと思う。また、彼等が忌憚なく意見交換をし、互いの長所・短所を受け入れ、経験不足を補い合い、学び合う姿が、非常に頼もしく感じられた。

「学習者を中心に考え、協働できること」、これは日本語教師として、備えるべき重要な能力の一つではないだろうか。学習者を中心に考えるからこそ協働できる、学習者を中心に考えるからこそ実践から学ぶことができる、協働の姿勢があるからこそ学び合うことができるのである。教育現場で実践を重ねることで獲得される能力もある。しかしながら、逆に喪失されてしまう能力もあるように思う。実習生8名が、「学習者を中心に考え、協働する能力」を失うことなく、さらにそれを伸ばし、日本語教育の現場で活躍することを期待したい。

多くの実習生にとって、この教育実習は教育現場での第一歩である。教育経験のない彼らが、実際に学習者を前に教壇に立つことにより得られるものがいかに大きかったかは言うまでもない。教えることの面白さも、難しさも、教えてみなければ実感できない。教育現場に立ってみなければわからないことは山ほどある。この経験を生かし、今の新鮮な気持ち、真摯な態度を忘れず、成長を続ける教師であってほしい。そして、研究だけでなく、教育現場を大切にする姿勢を貫いてほしい。